

石狐に刻まれた丁字模様

多 根 令 己

稲荷さんと石狐との関わり合いは、そう古いことではない。寛政年間（1789－1801）の「撰津国名所図会」をみても、豊津稲荷の境内には狛犬と思われるものが描かれている。

松江市の城山稲荷、大東町の稲荷神社、出雲市の大念寺稲荷などの古い稲荷社は、狛犬と石狐とが混在しており、狛犬の方が時代が古そうである。明治、大正期にも、狛犬が奉獻されることが間々あった。

今のところ、最古の石狐は、関東地方では宝暦12年（1762）東京都文京区大塚の吹上稲荷である。葛飾区金町の半田稲荷は、天明8年（1788）に再建され、区の史蹟指定をうけている。当初のものは、寛延元年（1748）に建立されたが今はない。

関西地方では、笠岡市福富稲荷にあり、文化11年（1814）の銘がある。湖陵町三部八幡宮の石狐には、天保2年（1831）の銘があるが、再建されたものであるから当初のものは福富稲荷よりも古いのではあるまいか。

石狐の台石に、いろいろの模様を刻むのは来待石特有のものである。津和野の太鼓谷稲荷、佐賀県の祐徳稲荷にはない。愛知県の豊川稲荷には御影石の宝殿に、七宝を刻んだのが奥の院に一基だけあった。岡山県の最上稲荷には大量の石狐の中に「丁字紋」を刻んだものが2体あったが、これは特例であった。来待石製の石狐も若干あったから、どちらかが他の石からヒントを得て真似したものか。御影石などに殆ど見られないのは、微細な模様は来待石以外の石には彫りにくいし、また彫っても余り見栄えがしないからであろう。

来待石に彫った文字や模様は、光に反射することが少ないので、比較的長く鑑賞できる。繊細優美な模様は、来待石造品の独壇場であるといっても過言ではあるまい。

かつて、石狐の台石に刻まれている、模様について調べたことがある。調査した稲荷社は、松江市では城山稲荷、開運稲荷、真名井神社、出雲市ではお茶屋稲荷、戸倉稲荷、平野稲荷、大社町の都稲荷、菱根稲荷、湖陵町の三部八幡宮、阿弥神社、三刀屋町の三刀神社、大東町の稲荷神社の14社である。

模様で一番多いものから列記すると、宝珠26、丁字19、打出の小槌17、鍵、蓑11、分銅9、宝巻9、大判小判5、七宝紋、硯、筆いずれも3、珊瑚、大福帳いずれも2、丁銀、三宝と瓶子いずれも1つと実に多彩なのに驚いた。

圧倒的に多いのは七宝であり、硯や筆は極く新しいものである。なお、宝珠を持つ石狐は雌であり、鍵を持つのは雄であるとも言われている。

七宝は「宝づくり模様」として、鏡や刀のつばなどや、袱紗、小袖、縫箔、打掛などの衣料品その他調度品に古くから用いられている。

しかし来待石の石工に最も強い影響を与えたものは、もっと庶民が親しんだ「江戸千代紙」だったのではあるまいか。

七宝が刻まれるようになったのは、稲荷大明神が、農業の神様から商売の神様に性格が変わって

いった時代の出来事であったろう。

松江市寺町の出世稲荷神社も、初め末次の地域が未開地であった頃に農業神として勧誘されたものである。開拓が進んで家々が立ちこみ商業地帯になると、商業神として崇められるようになったと社記に書かれている。

室町時代の七宝は、米俵、宝珠、砂金袋、鍵、隠れ蓑、打出の小槌であり、後に七福神を象徴する鯛や巻物が入ったと言われる。

丁字について

丁字は正倉院の御物にも入っており、聖徳太子の没後その冥福を祈って妃の橘大郎女が作らせたと伝えられる「天寿国繡帳」の一部にもある。この繡帳は、奈良斑鳩の中宮寺所蔵であり、私もむかし拝観したことがある。

正倉院は、756年に建立され、古くから沈香、白檀、丁字を混合した防虫剤が用いられている。

平安時代には栽培も試みられたが、丁字は熱帯植物であるから成功しなかった。

この頃は、中国を経由して南方から輸入されており、入手も困難ではなかったと思われる。丁字は粉末にして健胃剤、かぜ薬にも内服された。丁字をしぼった丁字油は、麻酔剤、防腐剤になった。刀剣用には、丁字油を屋根の上で寒晒しにしたものを椿油と混合したものが一般に売られており、これを1、2滴用いた。誤って純度100%の丁字油を刀剣に塗ったら刀剣の表面に穴が空いたという愛刀家の失敗談を聞いたことがある。

丁字風炉と呼ばれる香料具は今でも使われており、出雲市武志町の万福寺境内には、その用を失った陶器製のものが庭園の景物となっていた。吉田村の田部家のトイレには備えられており、当時の手銭白三郎県立博物館長が拝見されたと云う。勿論大社町の手銭家にも銅製のものと陶器製のものが所蔵されている。ただし陶器製のものは熱に弱くて実用には耐えなかったと御聞きした。

丁香は上流社会で貴ばれたので、七宝の中に教え入れられるようになった。むかし、行燈の灯心が丁字形になると、おめでたいしるしとして喜んだりした。

中世に入ると、丁字を手に入れるために、植民地の争いまであった。

1623年には、オランダの東インド会社が香料貿易から英国勢力を一掃して独占するにいたった。同社の株の配当は45%もあつたくらいで、同国は当時は世界一の富裕国であったと言われる。

長崎の人、西川如見（1648-1724）が元禄年間のころ著した「華夷通商考」によれば、「丁字は丁香という木の実を云う」とあり、土産する国に、占城（むかしの林邑国）交国の南なり。太泥、南天竺の内なり。

カラバア（ジャガタラ）、ジャワ、近年は皆ジャガタラのオランダの下知に従うとなり。番旦、近年オランダの支配と云えり。等の諸国や諸島の名をあげている。

日本の鎖国令は、1634年と1639年に出された。江戸時代は、丁字の輸入も次第に窮屈となり、商人はその入手に苦勞したと思われる。

いまでは、クローブ（丁字）はスーパーの調味品として、実も粉末も一瓶200円ぐらいで売られている程に広く熱帯地方で栽培されている。

しかし江戸時代には、宝づくしの中に入るくらいに高価なものであった。

オランダは、丁字の木を制限して値が下がるのを防いだ。モルック（香料）諸島の酋長が教育テ

レビに登場して、「クローブを切り倒すオランダの行動はトクテンと言いました。ホンギ、トクテンと名付けた戦いの中で、抵抗運動の指導者たちが、クローブの樹を絶やすまいと、森の奥深くに苗木を植えたのです」と語っているのが印象的であった。

1799年に東インド会社が解散した。1825年（文政8年）にオランダ通商株式会社が、その後を引き継いだ。その翌年の日本向積荷目録によれば、船は海難を避けるため2度に分散して航海し、合計で5.819キログラムの丁字が輸入されている。

丁字紋について

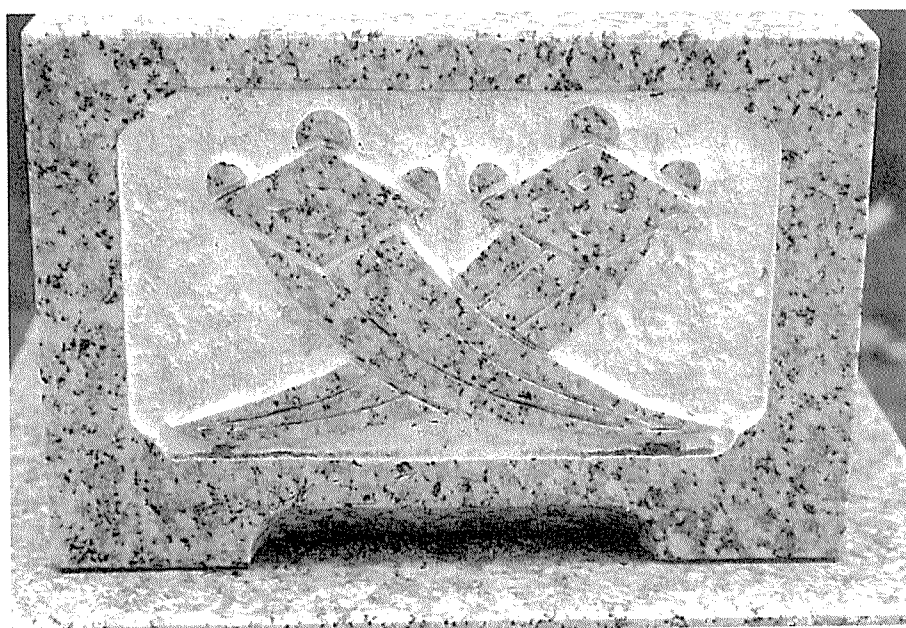
平安貴族に愛好された丁字は、やがて家紋にまで描かれるようになった。形が面白いのと、高貴な珍木を喜ぶ気持ちから丁字の花を文様化したもので、宝尺文など吉祥文には必ず用いる。紋章には、一丁子から九丁子まで約70種類もある。

「一つ丁字巴」を石川県七尾市の船商人は船印とした。彼等は命がけで世界に雄飛して各地の珍品を手に入れた。その活動のシンボルとして、モルツカ諸島の丁字を採用した。

なお、丁字紋は大根紋とよく似ている。四国88カ所の第85番札所、五剣山八栗寺の本堂横手の聖天堂の寺紋を丁字か、大根か見分けられなかった。寺僧に聞くと、本尊は歓喜天であり秘仏だと云う。歓喜仏と言えば多くは双体の象が抱き合う形のものである。

寺紋は男女二体の抱合歓喜の聖天をシンボライズとした「違い大根」であった。

そう言えば境内で来待石によく似た石で大根を二本彫刻したものを迂闊にも見逃していたのに気がついたことがある。



大念寺の丁字紋（新）